



柝の木からの手紙

2012年 4月号



自然界の命の躍動を感じられる季節めぐり。心・体の奥底のささやきに湧き上がる希望・膨らむ夢。このところ秋期入学入社の検討が始まっている。四季のはっきりした日本では、入学・就職・新たなスタートに相応しい時期が用意されている。

1年程前の冬、枕草子の暗唱に専念していた中学2年の娘の国語の教科書に心惹かれた事がある。それは、ドキュメンタリー映画監督の龍村仁著の「**ガイアの知性**」。

地球上で鯨・象・人は、大脳新皮質の大きさとその複雑さからみてほぼ対等な精神活動をしていると考えられます。でも、人と他の二種とは何かが違う。動物たちと接する中で気づいてきた事は、人の知性は、自分の思い道理に自然を支配しようという「**攻撃的な知性**」。反面、鯨や象の知性は、自然を受入れ理解し、自然に適用して生きようという「**受容的な知性**」だという。私たちは、人類より長くこの地球上で生きながらえてきた彼らに学んで、真の意味の「ガイアの知性」に進化する必要がある。といった、内容。

4日：清明 …万物が清々しく明るく美しい頃。

7日：満月 …WHO世界保健デー …旧暦3月17日

13日：美幌会会合 (15時頃～)

15日：家庭菜園セミナー 13時から 青稲ふれあい会館

20日：穀雨 …雨が降って百穀を潤す。

21日：新月(朔) …旧暦 閏3月 朔(1)日

ここで、ガイアとは、多様な生命を育む生命体としての地球を意味します。人の知性は「**唯物的知性**」、鯨や象の知性は「**唯心的知性**」と置き換えられ、両者の**調和**をとることで真の意味の「ガイアの知性」に近づけるのではないのでしょうか。

3月25日に**美幌会の総会**が、開催されました。17名が参加する中、予定時間前の暫しの間土谷町長との「**車座トーク**」？総会では、町長の挨拶を頂き「**環境を生かしたまちづくり**」を胸に、平成24年度の美幌会の活動がスタートしました。

希望に夢膨らむ春、**家庭菜園セミナー**を開催します。家庭菜園実施者及び興味のある人達が、地産地消・食育活動を通じて心と体の健康を深め、明るいまちづくり・生き生きとした高齢化社会に向けて、それぞれの人が家族・地域社会にとって必要な人材であり続けるための一助になればと願っています。

世界保健デーはWHOの設立を記念して制定されたもので、

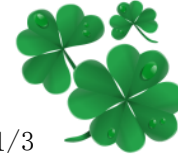
4月 卯 月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					



トマト苗 高橋笑子宅 今年のテーマは「**高齢化と健康**」・スローガンは「**健康であってこそその人生**」。



Smile Recipe



～ スマイル・レシピ ～

2012年 4月号-1/3

春、こころときめく季節。
今月のレシピは特別料理？です。
感性で味わってみてくださいね。

～ ガイアの知性 ～

龍村 仁 著
(教育出版)



ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとても多かった。特に意識的に選んだつもりはないのに、結果としてそうなってきた理由を考えると、これは、鯨や象と深くつきあっている人たちが皆、人間としてとてもおもしろかったからだ。

人種も職業も皆それぞれ異なっているのに、彼らには独特の、共通した雰囲気がある。

彼らは、鯨や象を、自分の知的好奇心の対象とは考えなくなってきた。鯨や象から、なにかとてつもなく大切なものを学び取ろうとしている。そして、鯨や象に対して、畏敬の念さえ抱いているようにみえる。

人間が、どうして野生の動物に対して畏敬の念まで抱くようになってしまうのだろうか。この、人間に対する興味から、わたしも鯨や象に興味を抱くようになった。そして、自然の中での鯨や象との出会いを重ね、彼らのことを知れば知るほど、わたしもまた、鯨や象に畏敬の念を抱くようになった。

今では、鯨と象は、わたしたち人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で（現在の地球環境では、体が大きければ大きいほど生きるのが難しい。）数千万年もの間この地球に生きてきてくれたのでは、とさえ思っている。

大脳新皮質の大きさとその複雑さからみて、鯨と象と人はほぼ対等の精神活動ができる、と考えられる。すなわち、この三種は、地球上で最も高度に進化した「知性」をもった存在だ、ということができる。実際、この三種の誕生からの成長過程はほぼ同じで、あらゆる動物の中で最も遅い。一歳は一歳、二歳は二歳、十五、六歳でほぼ一人前になり、寿命も六、七十歳から長寿のもので百歳まで生きる。本能だけで生きるのではなく、年長者から生きるためのさまざまな知恵を学ぶために、これだけゆっくりと成長するのだろう。

このような点からみると、鯨と象と人は確かに似ている。しかし、だれの目にも明らかなように、人と他の二種とは何かが決定的に違っている。

現代人の中で、鯨や象が自分たちに匹敵する「知性」をもった存在である、と素直に信じられる人は、まずほとんどいないだろう。それは、我々が、言葉や文字を生み出し、道具や機械をつくり、交通や通信手段を進歩させ、今やこの地球の全生命の未来を左右できるほどに科学技術を進歩させた、この能力を「知性」だと思いこんでいるからだ。



これらの点からみれば、自らは何も生産せず、自然が与えてくれるものだけを食べて生き、あとは何もしないでいるように見える(実はそうではないのだが)鯨や象が、自分たちと対等の「知性」をもった存在とはとても思えないのは、当然のことである。

しかし、一九六〇年代に入って、さまざまな動機から、鯨や象たちと深いつきあいをするようになった人たちの中から、この「常識」に対する疑問が生まれ始めた。



鯨や象は、人の「知性」とは全く別種の「知性」をもっているのではないか、あるいは、人の「知性」は、このガイアに存在する大きな「知性」の偏った一面の現れであり、もう一方の面に鯨や象の「知性」が存在するのではないか、という疑問である。

この疑問は、最初、水族館に捕えられたオルカ(シャチ)やイルカに芸を教えようとする調教師や医者や心理学者、その手伝いをした音楽家、鯨の脳に興味をもつ脳生理学者たちの実体験から生まれた。

彼らが異口同音に言う言葉がある。それは、オルカやイルカは決して、ただえさを欲しがために本能的に芸をしているのではない、ということである。

(鴨川シーワールドより)

彼らは捕らわれの身となった自分の状況を、はっきり認識している、という。そして、その状況を自ら受け入れると決意した時、初めて、自分とコミュニケーションしようとしている人間、さしあたっては調教師を喜ばせるために、そしてその状況の下で自分自身も、精いっぱい生きることを楽しむために、「芸」と呼ばれることを始めるのだ。水族館でオルカが見せてくれる「芸」のほとんどは、実は人間がオルカに強制的に教えこんだものではない。オルカのほうが、人間が求めていることを正確に理解し、自分のもっている高度な能力を、か弱い人間(調教師)のレベルに合わせて制御し、調整をしながら使っているからこそ可能になる「芸」なのだ。

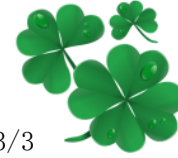
例えば、体長七メートルもある巨大なオルカが、狭いプールでちっぽけな人間を背ビレにつかまらせたまま猛スピードで泳ぎ、プールの端にくと、合図もないのに自ら細心の注意をはらって人間が落ちないようにスピードを落とし、そのまま人間をプールサイドに立たせてやる。また、水中から、直立姿勢の人間を自分の鼻先に立たせたまま上昇し、その人間を空中に放り出す際には、その人間が決してプールサイドのコンクリートの上に投げ出されず、再び水中の安全な場所に落下するよう、スピード・高さ・方向などを三次元レベルで調整する。こんなことがはたして、ムチと餌による人間の強制だけでできるだろうか。ましてオルカは水中で生活している七メートルの巨体の持ち主なのだ。

また、こんな話もある。

人間が彼らに何かを教えようとする、彼らの理解能力は驚くべき速さだそうだけれども、同時に、彼らもまた人間に何かを教えようとする、というのだ。



Smile Recipe



～ スマイル・レシピ ～

2012年 4月号-3/3

フロリダの若い学者が、一頭の雌イルカに名前をつけ、それを発音させようと試みた。イルカと人間では声帯が大きく異なるので、なかなかうまくいかなかった。それでも、少しくましくいったときには、その学者は頭を上下にうんうんと振った。二人（一人と一頭か）の間ではそのしぐさが、互いに了解した、という合図だった。何度も繰り返しているうちに、学者は、そのイルカが自分の名前とは別の、イルカ語のある音節を同時に繰り返し発音するのに気がついた。しかし、それが何を意味するのかはわからなかった。そしてある時、はたと気づいた。「彼女はわたしにイルカ語の名前をつけ、それをわたしに発音せよ、と言っているのではないか。」そう思った彼は、必死でその発音を試みた。

自分でも少しくましくいったかな、と思った時、なんとその雌イルカは、うんうんと頭を振り、とてもうれしそうにプールじゅうをはしゃぎまわったというのだ。



象については、こんな話がある。

アフリカのケニアで、ある自然保護官が象の寿命を調べるため、自然死した象の歯を集めていた。

草原で新しく見つけた歯を持ち帰り倉庫に納めておいたところ、その日から毎晩、巨大な象がやってきて、倉庫のかんぬきを開けようとする。不思議に思ったその保護官は、ある晩、かんぬきを開けたままにしておいた。すると、翌朝、数百個も集められていた歯の中から、その新しく収集した歯だけがなくなっていた。保護官がその歯を捜したところ、その歯はなんと、彼が発見したまさにその場所に戻されていたのだ。毎晩倉庫にやってきた象は、たぶん亡くなった象の肉親だったのだろう。それにしてもその象は、どうやって歯が倉庫にあることを知ったのだろう。数百個もある歯の中から、どうやって肉親の歯を見分けたのだろう。そして最大のなぞは、その象が、なぜ歯を元の場所にわざわざ戻したのだろう、ということだ。

このように、鯨や象が高度な「知性」をもっていることは、たぶんまちがいない事実だ。

しかし、その「知性」は、科学技術を進歩させてきた人間の「知性」とは大きく違うものだ。人間の「知性」は、自分たちだけの安全と便利さのために自然をコントロールし、意のままに支配しようとする、いわば、「攻撃的な知性」だ。この「攻撃的な知性」をあまりにも進歩させてきた結果として、人間は環境破壊を起こし、地球全体の生命を危機に陥れている。これに対して、鯨や象のもつ「知性」は、いわば「受容的な知性」とでも呼べるものだ。彼らは、自然をコントロールしようなどとはいっさい思わず、そのかわり、この自然のもつ無限に多様で複雑な営みを、できるだけ繊細に理解し、それに適応して生きるために、その高度な「知性」を使っている。

だからこそ彼らは、我々人類よりはるか以前から、あの大きな体でこの地球にいきながらえてきたのだ。

同じ地球に生まれながら、片面だけの「知性」を異常に進歩させてしまった我々人類は、今、もう一方の「知性」の持ち主である鯨や象たちからさまざまなことを学ぶことによって、真の意味の「ガイアの知性」に進化する必要がある、とわたしは思っている。